# 月刊島民

中之島

Vol.7 2009 2/1

橋を渡る人の「街事情」マガジン

書を持って島へ出よ！

# Library of Library

# ココがすごいぞ！中之島図書館。

取材・文／綱本武雄（本誌）

有名作家の代表作や文学賞の受賞作など、多くの著作の舞台になってきた中之島は、ある意味で本のゆりかごと言える場所なのかもしれない。江戸時代から政治や経済の中心として栄えてきた歴史と、多くの人の行き交う息遣いが、必然的にドラマを生みだしているのだろう。

大阪府立中之島図書館は、そんな本とのつながりを補強してくれる存在と言えるかもしれない。明治37年（1904年）に完成したネオ・バロック様式の重厚な外観に、54万冊という膨大な蔵書量を誇る。そして、中之島図書館には2つの顔がある。ひとつは江戸時代を中心とした古典籍や豊富な大阪資料を収蔵する顔であり、もうひとつはビジネス支援を目的にした資料がそろい、常に最新情報が集まる情報拠点の顔だ。いずれも実際に見て触れられるとあって、曜日を問わず多くの利用者でにぎわっている。見た目は古くても中身は新しい。いい歳の取りかたの模範のようで、何だかカッコいいじゃないか。

## ビジネスマン、大歓迎！

中之島図書館の特徴のひとつが、ビジネス支援サービスだ。関西随一という600の専門誌と310の業界紙、各種データベース、調査相談など「使える」情報が得られるので、平日はスーツ姿の来館者が目立つ。以前は商工資料室を備えていたこともあり、2003年に大阪商工会議所の図書館が閉館した翌年、中之島図書館でビジネス支援サービスを開始した。司書部長の前田香代子さんは「ビジネス機能が集積した中之島の立地があってこそ」と話す。

左から／面出しされ、使い勝手のよい専門誌の書架。この充実のラインナップは、出版元の協力で実現しているのだとか。／「かまぼこ新聞」をはじめ、タイトルを眺めているだけで世の中のしくみが見えてきそうな業界紙。／企業の歴史が背表紙の厚さににじむ、社史の数々も閲覧可能。シマゆかりの会社名もちらほら。



## 大阪のことはまかせなさい。

大阪資料・古典籍サービスは、あらゆる時代の大阪資料が揃う。最大のウリは江戸〜明治期の資料を手にとって閲覧できること。紙の手ざわり、印刷の風合いなど、触わることで得られる情報量は計り知れないとあり、全国からの来館者が後を絶たない。一方で、図版資料のデジタル化も進んでおり、一部はホームページでも閲覧が可能。ほかにも新聞各紙のマイクロフィルムや大阪府内をテーマにした出版物、年代別の住宅地図などが並ぶ。

左から／文久元年（1861年）に出版された「淀川両岸一覧」。ページをめくると、現れたのは八軒家浜の風景。／手書きの蔵書検索カードを発見。デジタル化が進む中では貴重な存在であると同時に、いいアジを出している。／すでに80回を数えた小展示スペースの企画展。3月11日までは外国人が大阪へやって来る際のガイドを集めた「A GUIDE BO OK to OSAKA 〜国際観光都市OSAKA〜」を開催中。

## 「一見さん」にも優しいのだ!!

**レトロ好きにはたまらん…。**
石柱が連なる堂々たる正面に、NHK「トップランナー」有川浩の登場回が収録されたことでも話題になった玄関ホール…と、シマが誇る重要文化財（本館）は、レトロブームの後押しも手伝い見学者が増えているそう。

**インターネットで錦絵が見られる。**
中之島図書館のホームページでは、「浪花百景」や安藤広重の「浪花名所図会」など、大阪にゆかりのある錦絵を閲覧できる。鑑賞に耐える大きな画像なので、図書館へ行かなくても楽しめてしまうのではと思うほど。

資料探しのご相談は、レファレンスカウンターへどうぞ

**大阪府立中之島図書館**
☎06-6203-0474
9:00AM〜8:00PM（土曜〜5:00PM）
日・祝＆第2木曜休
http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/

# 島民のための 島本（シマボン）“レビュー”

誰もが知っているあの名作の舞台になっていたり、作家の意外なエピソードに彩られていたり…。中之島にまつわる「島本」を、あんな角度やこんな切り口から徹底解説！さあ、書を持って島へ出るための準備を始めよう。

## 1 再読・島の名場面。

文／松本 創（本誌）

川があるせいだろうか。中之島を描いた小説は、はかなく去り行く者の物語が多い。**宮本輝『泥の河』**は、敗戦の傷跡残る中之島の西端が舞台。端建蔵橋のたもとの食堂、鉄屑を積んだ荷馬車の男、土佐堀川に浮かぶ廓舟。無言で去る舟を追って、友の名を何度も叫ぶ少年の声が胸を突く。**高村薫『黄金を抱いて翔べ』**は、銀行から金塊を盗み出すピカレスク小説。ビルの窓からマンホールまで執拗に調べ上げ、犯行計画を練るはぐれ者たちにも、いくつもの別れが訪れる。**浅田次郎『壬生義士伝』**は、名もなき新選組隊士の非業の物語。死の直前、故郷・盛岡に馳せる美しい回想、親友との悲痛な再会などは、すべて北浜の南部藩蔵屋敷での出来事だ。川にビルに蔵屋敷。どれも中之島ならでは、の名場面である。

### @南部藩屋敷跡

**『壬生義士伝』**
浅田次郎（文春文庫／全２巻）

鳥羽伏見の戦いで傷つき、北浜の南部藩蔵屋敷にたどり着いた新選組隊士、吉村貫一郎。剣の腕は確かだが、純朴で心優しく、故郷の妻子へ送金することだけが生きがいの男だった。切腹を命じられた貫一郎の独白と、彼を知る人々の昔語りによって、武士の義より人の義を貫いた「真の義士」の姿が明らかになる。柴田錬三郎賞受賞作。

### @土佐堀川

**『螢川・泥の河』**
宮本輝（新潮文庫）

「泥の河」は昭和30年夏の物語。少年は土佐堀川に現れた小さな舟に暮らす姉弟と出会う。幻のお化け鯉、大人たちのつぶやき、舟べりに散る青い火。幼い目に映る情景が、友との短い交わりと人の世のはかなさを予感させる。小栗康平監督の映画やマルセ太郎の独り芝居でも再現された、中之島の最も美しい小説。太宰治賞受賞作。

### @三井住友銀行 大阪本店

**『黄金を抱いて翔べ』**
髙村薫（新潮文庫）

土佐堀川に面した住田銀行の地下金庫に眠る６トンの金塊。その強奪計画に６人の男たちが集まった。鉄壁の防御を破る周到な犯行準備や得体の知れぬ連中との駆け引きを重ねる中で、それぞれの過去が浮かび上がってくる。中之島のビル街が燃え盛るクライマックスは圧巻。日本推理サスペンス大賞を受賞した著者のデビュー作。

## 2 阪大医学部 三部作。

文／松本 創（本誌）

かつて堂島川岸にあった大阪大学医学部がモデルの作品といえば、まず**山崎豊子『白い巨塔』**だ。教授選挙と医療裁判、それをめぐる人間たちの野望と苦悩を、詳細かつ重厚に描ききった医療ドラマの金字塔。悪しき権威主義と策謀渦巻く「伏魔殿」的イメージは強烈で、**手塚治虫『きりひと讃歌』**にも受け継がれた。手塚自身、阪大医学専門部の出身。「権威やキャリアという要素を抜きに医学界のドラマは作れない」と語っている。両作品から30数年を経た**『破裂』の久坂部羊**（くさかべよう）も阪大医学部卒の医師。千里へ移転後の医学部を舞台に、国家レベルのある陰謀を描く。「医学は何のために、医師は誰のために」をシリアスに問う阪大医学部三部作。あ、モデルとはいっても、もちろんフィクションです、念のため。

**『白い巨塔』**
山崎豊子（新潮文庫／全５巻）

浪速大学第一外科の財前五郎は、食道外科の若き権威。教授になるという積年の野望へ、権謀術数の限りを尽くしてまい進する。一方、研究に情熱を注ぎ、常に患者の立場を考える第一内科の里見脩二。医療裁判を通じて対立することになる２人の心の内を映すように、堂島川の水面がうつろう。何度もドラマ化・映画化された永遠の名作。

**『きりひと讃歌』**
（小学館文庫／全３巻）

犬のような顔になる奇病「モンモウ病」。その原因を探るため、四国の寒村へ出向いたM大学第二内科の小山内桐人。だが、自ら発病してしまい、流転の旅が始まる。やがて、すべての発端は、日本医師会会長を目指す竜ケ浦教授の陰謀だったことが分かり…。『白い巨塔』を多分に意識しながらも、マンガならではの神話的表現で描いた傑作。

**『破裂』**
（幻冬舎文庫／全２巻）

医師の未熟で患者を死なせる「痛恨の症例」を調査していた阪都大学麻酔科の江崎は、心臓外科のエリート助教授、香村が手掛けた患者の不可解な死を追及する。裁判へと発展し、大学を追われる江崎。一方、香村が研究する新療法の「欠陥」に厚労省の異能官僚が目を付けて…。医療の進歩はどこへ向かうのか。読後に重い問いを残す問題作。

●久坂部羊氏インタビュー

### 「大阪だからこそドラマが生まれる」

阪大の医学部と附属病院（外科・麻酔科）、その前の浪人時代を合わせ、中之島へは計７年通いました。よく覚えてますよ。中之島図書館や伝説のココア専門店［赤い鳥］、学校帰りに橋から眺めた川面の灯…。医療のあり方に疑問を抱いたこともあります。血管や臓器ばかりじゃなく、もっと「人間」と向き合うべきじゃないのか、とか、治らない病気を抱えた人をどうケアするのか、とか。まあ、勉強が嫌いだったのと（笑）、もともと文学志向があったので。当時の問題意識は、小説のテーマにもつながっています。

『白い巨塔』のような話を実際に体験したことはないですね。でも、昔は国立大学の、しかも外科の教授といえば絶大な権力とお金を握っていたから、阪大に限らず、ああいう世界はあったでしょう。財前五郎は少し極端ですが、教授の座を目指すことが激務に耐えるモチベーションにもなったはず。そういった人物造形やストーリー展開、医療や裁判知識のリアリティなど、すべてにおいて素晴らしい作品です。

阪大医学部が物語を生むのは、阪大だからというより、大阪だからでしょうね。大阪人や大阪弁には、ええカッコしないむき出しの本音やギラギラした感じがあって、そこが人間ドラマになりやすい。私の１作目と３作目は神戸が舞台ですが、２作目の『破裂』を構想した時、「今回は大阪やな」とごく自然に考えました。強烈な個性の人物をリアルに描くなら、やっぱり大阪なんですよね。

# 3 司馬遼太郎が書いた、島を歩く。

取材・文／大迫 力（本誌）

アンケートを取ったわけではないが、きっと島民の好きな作家ベスト3には確実に入るであろう作家・司馬遼太郎。物語自体の面白さもさることながら、登場人物たちの気概に触れ、感銘を受けたサラリーマン諸氏も多いのではなかろうか。ところで、実は中之島周辺にも、司馬遼太郎作品に関連するスポットは数多い。そう聞いて、京都から歴史小説好きの書店員が文庫本片手に来島。いざ、シバリョーをめぐる島の冒険のはじまり、である。

**歩いた人／井上義章さん**
京都ではおなじみの［大垣書店 烏丸三条店］勤務。高校生時代から読書に目覚め、『竜馬がゆく』から司馬遼太郎にハマった正しき歴史小説フリーク。空手の有段者で、精神的にも鍛錬された武士の生きざまに感じ入ることも多いという。

## 大坂武士の粋、ここにあり。
## 木邨長門守重成表忠碑

続いて、なにわ橋駅の北側へ。井上さんも「骨のある武士」と尊敬する木邨重成を祀る石碑がある。大坂冬の陣・夏の陣の様相を描いた『城塞』では、徳川の大軍にうろたえる豊臣勢の中で、勇猛果敢に戦った若武者として登場する。「石碑が建つってスゴいことですよね。あの坂本龍馬の銅像だって、お金を出す人があまりいなくてなかなか実現しなかったらしい」とさすがのウンチクもご披露。

**『城塞』**
（新潮文庫／全３巻）
豊臣vs徳川の最後の大戦を記した傑作長編。合戦シーンだけでなく、徳川方の挑発に乗り全面対決へ向かうも、なかなか一枚岩になれずやがて没落する豊臣家の悲哀も読み応えがある。大阪人としてはやはり読んでおきたい。

**『若江堤の霧』**
（『俺は権現』講談社文庫）
戦国時代の有名無名の強者たちが主人公となる短編集に所収。若いながらも才知に溢れる重成の姿と共に、没後のエピソードも書き込まれる自伝的な面も。中之島縁の人物が主役となる物語があるのは嬉しい。

**『花神』**
（新潮文庫／全３巻）
農民から身を起こし、医師から倒幕軍の司令官、そして明治政府の中枢で近代兵制の礎を築くまでに到った大村益次郎の波瀾万丈の生涯を描いた長編。福澤諭吉が大村のことを噂していたなど、適塾での日々は上巻に詳しい。

## 山口出身・大村益次郎の縁の地。
## 適塾

まずは有名な適塾へ。『花神』の主人公・大村益次郎もここで学んだ。同じ山口県出身なんですけど、あんまり知らなくて…」。天井の低さや急な階段に目を見張る井上さん。大村が塾頭を務めたこと、入塾者の出身地ランキングで山口県がトップなのを見て思わず顔がほころぶ。

適塾内をしげしげと眺める井上さん。あの、塾に刀傷はないと思うんですけど…。

なにわ橋駅

淀屋橋駅

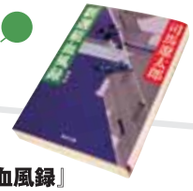
京阪本線



## なんと新選組が大立ち回り!?
## 北新地

井上さんが最も好きな『新選組血風録』の名シーンに北新地が登場する。遊びに出かけた新選組一行が、大阪角力の力士と遭遇。狭い道でぶつかりそうになったところを、新選組局長・芹沢鴨が切って捨てる。ぐるぐると界隈を歩き狭い道を見つけては「こんな道だったのかな」と想像を巡らせる井上さんであった。

今からは想像もつかないが、北新地の真ん中を「蜆川（しじみがわ）」という川が流れていた。事件が起こったのはその橋の上。「桜橋」や「蜆橋」を記した碑が今も残る。



**『新選組血風録』**
（角川文庫）
隊士一人ずつを主人公に、15の物語からなる連作短編集。力士との悶着は「芹沢鴨の暗殺」に登場。土方歳三に芹沢暗殺の心を固くする契機となる。また、「槍は宝蔵院流」には冒頭に八軒家の船着場が登場している。

堂島川

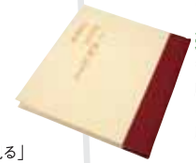
大江橋駅

京阪電車中之島線

土佐堀川

## まだまだ書いています。

**堂島米相場×『俄―浪華悪侠伝』**
（講談社文庫）
幕末から維新期にかけて、「どづかれ屋」から名をあげていく明石屋万吉の一代記。ヤクザの親分、侍大将…場当たり的ながらも力強く生きる姿は苛烈だが痛快。前半のハイライトである堂島米相場の襲撃が、万吉の終生の「ハク」となったのは、やはり米相場が当時の経済の中枢であったためだろうか。



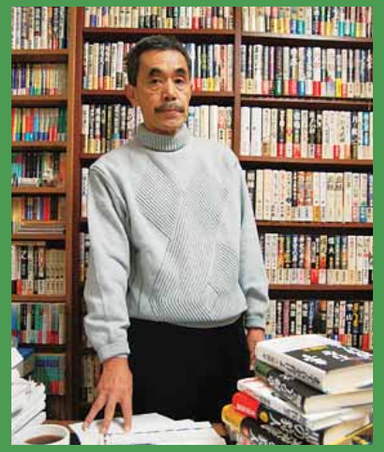
**適塾×『洪庵のたいまつ』**
司馬遼太郎が子供たちに伝えたいと願った文章をまとめた『二十一世紀に生きる君たちへ』に所収。緒方洪庵という人物をとても尊敬していたと見え、弟子たちへの指導を「たいまつ」と表現。それが後になって様々な分野で「あかあかとかがやいた」と述べている。［司馬遼太郎記念館］のみにて販売している。

**SPECIAL THANKS!!**
**司馬遼太郎記念館**
司馬遼太郎氏の蔵書を並べた、「見る」よりも「感じる」ための記念館。安藤忠雄氏設計の書架は必見である。司馬作品と中之島のつながりについて「こんなのもありますよ」とご教示をいただいた。6月21日（日）まで「司馬遼太郎が描いた絵画展」を開催中。
●東大阪市下小阪3-11-18（近鉄河内小阪駅下車）☎06-6726-3860　10:00AM～4:30PM（入館）月曜休（祝日の場合は翌日休）大人入館料500円

## ホンショク 本の職人❶

取材・文／若狭健作（本誌）

### ブックデザイナー
### 多田和博さん（60）



### 手がけた本は４千冊以上、売れる本の仕掛け人。

『マークスの山』『永遠の仔』『蒼穹の昴』『OUT』『半落ち』…誰もが知っているベストセラーの表紙をめくると「装丁・多田和博」の文字が。日本を代表するそのブックデザイナーの仕事場は八軒家浜近くのビルの一室にある。これまで4000冊以上を手掛けてきた本は書棚からあふれ、保管用の倉庫を借りるほど。

もともと広告デザイナーとして活躍してきたが、1986年に子どもの頃から憧れてきた手塚治虫の『ブラックジャック』の装丁をまかされ、ブックデザインの道へ。「デビュー作が手塚作品なんて本当に僕は運がよかった」。その後、大阪に住む高村薫の作品をまかされ、作家から直接「多田さんにお願いしたい」と指名される売れっ子になった。佐々木譲、黒川博行、久坂部羊…重厚で骨太な作品の世界観を表現できる数少ない職人だ。

多い時はひと月で40冊。「出版社から送られてくるあらすじだけでは登場人物の心象風景が分からないから」と、どれだけ忙しくても原稿はすべて最後まで読む。デザインは最低でも３つ以上提案する。「だって僕のせいで売れなかったら嫌でしょ」と笑うが、作品に真摯に向かう姿勢で20数年。出版業界の最前線を今もひた走る。

仕事場に積まれるゲラ原稿。ホテルに缶詰めになって1日20時間以上読むこともある。

# 5 島が結んだ作家の縁。

文／松本 創　大迫 力（本誌）　絵／網本武雄

## オダサクfeaturing 五代友厚。

一昨年、続編が発見され話題を呼んだ『夫婦善哉』をはじめ、愛する大阪の庶民の暮らしを描いた作品が多いオダサク文学にあって、本作のような伝記小説は珍しい。太平洋戦争という時代の風潮を受けて、彼が選んだ素材は大阪の大恩人・五代友厚。といっても、まだ才助という幼名で呼ばれ勤王開国を志した青春時代にスポットをあてた。話術に長けた饒舌な人物に仕立て、彼を慕う女・お露との心の通いを随所に織り交ぜるあたりに、ならではの演出が光る。

『五代友厚／織田作之助全集3』
織田作之助（講談社）

## 大将のやってみなはれ魂。

ヘンコツ、怒りっぽい、変わり者、さらには女性関係までも遠慮なく書いた本作は、美談だけを並べた伝記とは一味違う。〝大将〟と呼ばれた「寿屋」（現・サントリー）創始者の鳥井信治郎。明治生まれの実業家が赤玉ポートワインや国産ウイスキーの製造と次々に突進してきた同社の熱気を山口瞳が伝え、息子で2代目の佐治敬三の物語を開高健が綴った。脂の乗りきった両作家の筆力で、社史といえども小説のように楽しませてくれる。挿絵はもちろん柳原良平。なんともぜいたくな一冊である。

『やってみなはれ みとくんなはれ』
山口瞳・開高健（新潮文庫）

## 「おせいどん」も島民だった？

「写真どないだす」と中之島の公園で街頭スナップの営業をして貯めたお金で、祖父は福島に「田邉写真館」を新築。ここで田辺聖子は生まれた。見習い技師の若衆や女中衆、居候までいる大所帯、路地の物売りや夕涼み、屋台の紙芝居など、幼少時代の情景に田辺文学のルーツがうかがえる。梅田新道の金物問屋で大阪商人のユーモアを吸収し、デビュー作『花狩』は中之島図書館で調べて書き上げ、芥川賞祝賀会は綿業会館で…と〝おせいどん〟と界隈の縁も随所に。島民ゴコロをくすぐってくれる。

『楽天少女通ります 私の履歴書』
田辺聖子（ハルキ文庫）

## 【同僚】庄野潤三と阪田寛夫

昭和26年、中之島の朝日会館に開局した朝日放送の「教養番組班」は、文学同人誌みたいな雰囲気だったそうだ。班長の庄野潤三は、女性や子供向けのラジオ番組を制作しながら、「その心はここになくて、文学の高みを一途に指していた」。班員たちは庄野の作品を読み、文学談義を交わすうち、全員が影響を受けたという。中に阪田寛夫がいた。庄野の同僚だった期間はわずか2年だが、文学の先輩として終生慕い続けた。ともに芥川賞を受賞した2人の絆はシマから始まったのである。

『プールサイド小景・静物』
庄野潤三（新潮文庫）

平穏な家庭に忍び寄る不吉な影を描いた「プールサイド小景」は、昭和29年の芥川賞受賞作。会社の金を使い込み、クビになった夫が訪れるプールは、著者の父や兄が学院長を務めた帝塚山学院だそう。阪田寛夫が朝日放送時代に読んで衝撃を受けた「舞踊」、村上春樹がフェイバリットに挙げる「静物」も、同じく夫婦を扱った作品。

『阪田寛夫詩集』
阪田寛夫（ハルキ文庫）

♪サッちゃんはね、サチコっていうんだ、ほんとはね…の「サッちゃん」をはじめ、「ねこふんじゃった」「うたえバンバン」など、童謡詩人としても多くの仕事を残した阪田寛夫。「都会人らしいセンス、大阪人らしいバイタリティー」「新しい語感を持ったコトバの出現」と作曲家たちに激賞された詩作品132編を収めたアンソロジー。

## 【上司・部下】井上靖と山崎豊子

古い新聞記者には文士然とした一匹狼が珍しくない。堂島にあった毎日新聞学芸部の井上靖がそうだった。毎朝5時に起きて小説を書く。会社ではどこか超然として、近寄り難い存在だった。その下で取材のイロハを学んだ若手記者が山崎豊子。ある時、ひどく沈んだ顔で闇市を歩く井上に出会う。聞けば、「君もほめてくれた自信作が選に漏れた…もう駄目だ」。思わぬ上司の弱音に、山崎は絶句したという。井上が芥川賞を獲る2年前の話。後を追うように、山崎も数年後、作家デビューを果たし、直木賞に輝く。

『猟銃・闘牛』
井上靖（新潮文庫）

小さな夕刊新聞社が社運を賭けた闘牛大会を企画。日一日と本番が近づき緊迫感が増していく中、主人公・津上の元にはさまざまな人物が、それぞれの思惑を孕んで群がってくる。登場する地名などから新聞社の場所は、毎日新聞もあった堂島界隈と推察。この「闘牛」で井上は芥川賞作家となった。

『花のれん』
山崎豊子（新潮文庫）

吉本興業の創始者として知られる吉本せいがモデル。遊び人の夫に愛想を尽かし、寄席小屋を買い取るところから家の再興をはかる。ぐいぐい商売を軌道に乗せていく手腕は実に爽快。桂春団治や花菱エンタツ・横山アチャコなどの人気者が実名で出てくるのが楽しい。著者の人気を確かにした直木賞受賞作。

# 4 作家が書いた「島の偉人」伝。

文／若狭健作（本誌）



# ホンショク 本の職人❷

取材・文／若狭健作（本誌）

## カペラ書店代表 秋末 勝さん（64）

### 定期購読4年連続日本一、御用聞きのトップランナー。

わずか20坪の店ながら、日本一の雑誌定期購読数を誇る書店が新ダイビル地下にある。「配達のない日はない」と代表の秋末勝さんは〝ペダルエクスプレス〟と呼ぶ愛車スーパーカブにまたがり、中之島はもちろん大阪のオフィス街を走り回る。得意先は3000口座。大企業の役員室へも「こんちは、こんな本出てますよ」とフリーパスだ。

「僕の商売は〝押し売り〟じゃなくて〝置き売り〟。数ある出版物の中から『この人にはこれ』と選んだ本を置いてくる。気に入ってもらったらお買い上げですわ」。

34年のキャリアで培った得意先との濃い関係は「司馬遼太郎の新刊が出たら数百人のお客さんの顔が浮かぶ」ほど。10年前からは、秋末さんが〝戦友〟と呼び信頼する澤井嘉子店長（写真下）とともに手作りポスターに力を入れてきた。絵心のある彼女の感性で、自分たちなりに本の魅力を表現し、御用聞きの強力な武器になった。「お店はサロン。自由に立ち読みができる展示場じゃなく、お客さんと話しながら丁寧に一冊をおすすめしたい」というお店にはこの日も、近くの会社を定年退職後も足しげく通う常連さんの姿があった。

一枚の制作に10時間以上かける大作ポスターも。「欲しい」というファンも多いのだとか。
☎06-6344-2887　9:00AM〜6:00PM（土曜〜3:00PM）　日・祝休

# 忘れちゃいけない「島民選書」。

**さて、島民が読むべき中之島本はまだまだいっぱい。小説、建築、雑誌…ジャンルも様々な冬の課題図書をご紹介。**

文／大迫力　網本武雄　松本創　若狭健作（以上本誌）

### サラリーマン必見！共感必至の自伝的小説。

**『広告放浪記』**
朝暮三文（ポプラ社）

主人公・アサグレは、堂島にある弱小広告代理店の新人営業マン。駅前ビルの奥にひそむ喫茶店でサボったり、ニヤリ（&ギクリ）とする島民は多いはず。意外に知らない広告代理店の仕事の裏側を知る楽しみも。

### 大阪の建築と言えば中之島抜きに語れない。

**『大大阪モダン建築』**
橋爪紳也監修（青幻舎）

大大阪と呼ばれた時代の風情を残すレトロモダンな建築のガイド。一つずつのスペースが多く割かれており、雰囲気だけの紹介ではないのが良い。中之島エリアはトップで登場。1番目はもちろん大阪市中央公会堂だ。

### 適塾の青春群像は中之島とともにあり。

**『陽だまりの樹』**
手塚治虫（小学館／全6巻）

「マンガの神様」晩年の傑作は、歴史の敗者の視点から描いた幕末大河ドラマ。曾祖父の手塚良仙が学んだ適塾の青春群像、その背景に中之島界隈が活写される。本作のネタ本になった福澤諭吉『福翁自伝』もぜひ。

### この橋はなぜこの名前？その由来がわかる。

**『大阪 地名の由来を歩く』**
若一光司（ベスト新書）

通りの名から市場、橋など、誰もが歩いたことのある地名について、その由来や歴史を解説。中之島の地名や橋も多く登場する。言われてみれば、大阪の地名には「なぜこの名前に？」と気になるものが多かった。

### 島が笑いの舞台に！人間国宝のネタ本。

**『桂米朝コレクション第4巻』**
桂米朝（ちくま文庫）

商売の噺を集めたこの巻では、大川町（今の淀屋橋界隈）の宿屋で高津宮の富くじを買いドラマが始まる『高津の富』や、堂島の米相場師にゲン担ぎの文句で笊（いかき）を売る『米揚げ笊』など、中之島周辺が登場。

### ノーベル賞学者も、島へ通っていた。

**『旅人 ある物理学者の回想』**
湯川秀樹（角川ソフィア文庫）

日本初のノーベル賞学者が述懐する半生の記。阪大に勤めた「島民」時代は、中之島と京大のある百万遍を行き来していたとか。京阪中之島線があれば楽だったのにね、博士。詳細は「ナカノシマニア」（P21）にて。

### 島民なら深く頷ける国民的作家の大阪論。

**『司馬遼太郎が考えたこと 13』**
司馬遼太郎（新潮文庫）

司馬遼太郎が様々な媒体に書いた長短のエッセイを収録。著者の大阪論と言える「大阪の原形」は、中之島の話ではないものの、町人たちの自主性や、川や堀の重要性に言及しており、島民にとっては共感しやすい。

### 実はこの人も「島生まれ」でした。

**『檸檬』**
梶井基次郎（新潮文庫）

万城目学『ホルモー六景』にもモデルとなった人物が登場する夭折の作家は、湊橋のたもと、土佐堀通の生まれ。若き焦燥とささやかな諧謔心を描いた表題作は、友人の「島民詩人」三好達治の尽力で出版された。

### 水辺の風景が、詩人の心を捉えた？

**『測量船』**
三好達治（講談社文芸文庫）

昭和の抒情詩人は幼少期、福島や江戸堀に暮らし、中之島図書館へ通った。その縁か、本書所収の詩壇デビュー作「乳母車」の碑が中之島公園に。郷愁あふれる言葉の向こうに島の風景を読むのは、うがち過ぎか。

### 大阪人的ザ・中之島研究讀本。

**『大阪人』**
（大阪市都市工学情報センター）

2009年1月号の特集が、ずばり「中之島」。22の橋の歴史についてこれでもかの勢いで語るブロックなど、圧倒的な偏差値の高さ。さすがに先輩の余裕か、「島民」というフレーズは使われてはいなかった（たぶん）。

### 元祖・純愛ものの出会いの舞台は…。

**『愛と死をみつめて』**
大島みち子・河野実（だいわ文庫）

1963年出版、160万部を売り上げたベストセラー。難病に冒され21歳で生涯を終えたミコ（大島みち子）と、大学生のマコ（河野実）との3年間に及ぶ文通を書籍化。2人が運命の出会いを果たしたのが阪大病院だった。

### 島の新名所が雑誌の表紙で登場。

**『GAJAPAN』**
（エーディーエー エディタ トーキョー）

日本国内の現代建築を中心に、豊富な写真とテキストで紹介する専門誌。その93号の表紙を、ほたるまちに完成した朝日放送の新社屋が飾った。設計は隈研吾。川に開かれ、木材を多用した建物の特徴がよく伝わる。

### 堂島が舞台の、米をめぐる知恵くらべ。

**『いのちの米 堂島物語』**
富樫倫太郎（毎日新聞社）

貧しい農家の息子である能登屋吉左右衛門が米相場の仲買人になるべく成長する姿を描く。もちろん時代は江戸時代だが、米を「株」に読み替えれば現代の証券取引にも通じる面も。金融業界の人にはスリル満点か？

## 島民フェア やっちゃいます。

今回の島本特集に合わせ、［ジュンク堂書店大阪本店］にてフェアを開催。誌面で紹介した本のほか、関連書籍や［ジュンク堂書店］独自セレクトの中之島にまつわる本が並びます。「これ、面白そう」と思った方はぜひ来島＆来店を。さらに『月刊 島民』のバックナンバーも揃う予定。コンプリートするためのチャンスです。
◎期間：2月1日（日）～2月28日（土）
［ジュンク堂書店 大阪本店］☎06-4799-1090　10:00AM～9:00PM　無休

### あのミステリー作家の中之島評とは？

**『大阪探偵団』**
有栖川有栖・河内厚郎（沖積舎）

大阪生まれの作家にミステリー好きがあれこれインタビューする形で展開。創作の現場などミステリー関連の話題が多いものの、関西の街についても飛び火。「東京人は映してくれない」という中之島評は言い得て妙。

## 書を持って、人に会おう！
### ～本のイベント「書評カフェ」～

取材・文／若狭健作（本誌）

なにわ橋駅の地下1階、アートエリアB1で毎月開かれる書評カフェ。「1冊の本をアテに知的な空間や時間を過ごす」と、企画する大阪大学コミュニケーションセンター特任准教授の西川勝さんがコンセプトを教えてくれた。哲学書、文学作品のほか写真集や漫画を取り上げたことも。この日の評者は大阪大学文学部3回生の橋本亮さん、現在就職活動中の彼が選んだ1冊は『ひと相手の仕事はなぜ疲れるのか―感情労働の時代』。20分ほどの内容説明のあと、議論はスタートする。

本の感想について実体験を交じえて話す西川さん（右）。

著者によると「感情労働」とは、看護師や医師、教師、ファーストフード店の接客業など、自分の感情を抑えて「本当の自分」とは違う仮の姿を強いられる労働のこと。介護現場での経験を持つ西川さんが「〝本当の自分〟っていうのがクセもの。そもそもそんなものあるのか？」と口火を切ると、会場から次々に手が挙がる。ルールは二つ。人の話を最後まで聞くことと、自分の意見を語ること。

40人を超える参加者の顔ぶれは、重役風のご紳士からOLさん、学生まで様々だ。「仕事で演じていようがそれも本来の自分」「面接で自己アピールさせられるのも感情労働なんじゃないか」「スマイル0円ではなく対価を払うべきだ」など見ず知らずの人たちが熱く語り合う。聞いているだけでも、事前に本を読んでいなくても楽しめる2時間。最後に「書を持って人に会おう」と西川さんが締めくくったイベントは、終了後も見知らぬ人同士の立ち話が続けられたのだった。

### 中之島哲学コレージュ

京阪電車なにわ橋駅地下1階にある「アートエリアB1」で、2月も毎週金曜日7:00PM～9:00PMに哲学カフェや書評カフェなどを開催。参加費無料で入退場自由。温かいコーヒーはセルフサービスで。プログラムの詳細はartarea-b1.jp

# 大「島民」MAP

**橋を渡って通う人、川を見ながら帰る人、みんな「島民」です!**

*Talk about bridges!!*
橋の話をしよう⑦

# 天神橋

文／ぽむ企画
絵／綱本武雄（本誌）

**み江**　それは何が見どころですか？

**桂**　もちろん骨組みですよ。9本もの連続するアーチ鋼と無数の**トラス**[※2]が描く美しい幾何学模様を堪能できます。ありがたいことに、アクアライナーは天井がガラス張り！　橋の構造美も楽しめるように気を遣ってくれていて、素晴らしいですね。

**み江**　いや、絶対それ目的と違うから。

**桂**　そして橋をくぐりぬけながら、偉大なご先祖さまにも思いを馳せたいものです。

**み江**　先祖って天神さんのこと？

**桂**　いや、橋自身の先祖。まずは江戸時代につくられた木製橋。既に天満橋、難波橋とあわせて「浪華の三大橋」と呼ばれる存在で、**公儀橋**[※3]として何度も火災で燃えたり洪水で流されたりしながらも復旧が繰り返されてきました。

**み江**　大事な橋だったんですな。

**桂**　そして明治時代にできた鉄橋は、ドイツから輸入された鋼材でつくられたもので、道路橋としては、当時全国たかぎみ江（以下、み江）　天神橋というと日本一長い商店街・天神橋筋商店街が有名だけど、天神橋自体も、かなり長いよね。特に天満橋駅直結の船着場「**八軒家浜**[※1]」あたりから眺めると、相当な長さを感じる。

**平塚桂（以下、桂）**　そこから川を走るアクアライナーに乗ると、楽しいですよ。天神橋を横から下から斜めから堪能できます。

**み江**　視野の広いデザイナーさんなんだな…。橋が水平だからこそ、逆にビョコンと橋から突き出した照明灯が印象的ですね。

**桂**　これも、元良勲のこだわりだそう。「提灯行列のように並んだ照明燈は、之れを下から見上げると天神様の紋章梅鉢の形になっている」（前掲書）と。

**み江**　オシャレなデザインだけど、やっぱり天神橋を名乗る以上、天神さんからは逃げられないんだな。

**ぽむきかく**　たかぎみ江、平塚桂の2人による建築ライターユニット。「カーサ・ブルータス」ほかの雑誌にも執筆。「けんちく家対決」や「けんちく雑誌ガイド」など独断と偏見に満ちたコンテンツの溢れるHPも必見。

※1　**八軒家浜**
2008年3月に開港した船着場。京阪電車天満橋駅の北に隣接し、四社の観光船が就航している。京都・伏見と大阪を結ぶ三十石船の発着場に由来。

※2　**トラス**
構造形式の1つで、部材の節点をピン接合（自由に回転する支点）とし、三角形を基本にして組んだ構造。

※3　**公儀橋**
江戸幕府が直轄し、幕府の経費でつくられた橋のこと。大阪市内では天神橋、難波橋、天満橋の三大橋のほか、高麗橋など計12橋があった。

※4　**第一次大阪都市計画**
1921年にスタートした、既成街区の造成事業。御堂筋をはじめ42路線の街路の新設・拡張と中之島82の橋梁を耐火構造に改築した。

※5　**元良勲**
もとら・いさお　1900年生まれ。1924年に京都帝国大学の建築学科を卒業後、師匠武田の指導を仰ぎつつ、大阪市内の多くの橋の設計に関わる。

**天神橋**
1934年完成の鋼アーチ橋。明治初期までは木橋だったが、1885年の水害で流失し1888年に鋼製のトラス橋として架け替えられ、松屋町筋の拡張に合わせて、ほぼ現在の形に。北区天神橋から中之島東端をかすめ、中央区北浜東をつなぐ。全長210.7m。



最長でした。

**み江**　天神橋だけで、橋の技術の歴史が語れそうな勢いですね。しかし現在の橋も、ゆったりとカーブするアーチがエレガント。先輩たちにひけをとらない格好よさです。

**桂**　『**第一次大阪都市計画・事業誌**[※4]』という昔の資料によると、最初はコンクリートアーチとして設計されたようですが「工事進捗中基礎地盤の耐力が充分でない事が確かめられるに至った」がために鋼アーチになったとか。

**み江**　鋼アーチで正解！　あの場所にコンクリートの橋が横たわっていたら、おそらく、ダムみたいにゴツく見えてしまうよ…。

**桂**　中之島の玄関口として、重すぎず、かといって印象が弱いわけでもなく、ほど良い存在感ですよね。

**み江**　水平を強調したデザインが、ビル街の縦のラインと、いい感じにマッチしているなあ、と。

**桂**　橋の設計に関わった**元良勲**[※5]による「建築が縦の方向に延びているのに対して、河川と橋梁が横の方向に延び、両者の対照は巧まずして都会美を形造って呉れる」（『建築と社会』1936年6月号）とのこと。天神橋だけではなく大阪の橋全体を意識した発言ですが、将来的に周囲がビル街になることを見越して、橋は水平のラインを強調して対比の効果を狙ったようです。

| | |
|---|---|
| ふりがな　うちだ　のぞむ<br>氏名　内田　望 さん | ふりがな　にほんせいこうかい かわぐちきりすときょうかい　しさい<br>職業　日本聖公会 川口基督教会 司祭 |

経歴
- 昭和33年　京都に生まれ、牧師の息子として育つ。
- 昭和51年　桃山学院大学社会学部で福祉を専攻し、卒業後は福祉施設に８年間勤める。
- 平成元年　牧師をめざすべく、東京の神学校へ。説教の作り方や儀式などを３年間学ぶ。
- 平成6年　見習い期間、試験を経て、はれて司祭となり、東住吉区の教会に赴任する。
- 平成17年　川口基督教会に転勤になり、２代目司祭として現在も勤める。

明治維新期、中之島のすぐ西に位置する川口に外国人居留地が誕生した。街には洋館や街灯が建ち並び、辺り一帯は大阪の新しい顔として賑わった。川に囲まれた街のルーツは川口にあり！　ということで、その歴史を今に伝える川口基督教会にうかがった。

1920年築の建物は、阪神淡路大震災で甚大な被害を受けるが、信徒と地域の支援で復旧再生されている。職業柄、歴史的建築物の再生がどれほど大変かということは知っている。莫大な費用だけでなく、そもそも建物が真に愛されていないと叶わない。内田司祭の一番のお務めは日曜日の聖餐式（ミサ）である。信徒は遠く関東や九州からも訪れて来るらしい。もちろん日曜だけではない。病気などの事情で教会へ来られない人のため、平日に信徒が暮らす遠方までお祈りに赴く。司祭のお仕事ってハードなんですね。

## 司祭になった理由？それを語りだすと一晩では終わらないですよ（内田）

大学卒業後の数年間、内田さんは社会福祉施設で働いていた。「牧師にだけはなるまい」と、同じく牧師である父の背中を見て、そう考えていたらしい。しかし30歳の時、あることをきっかけに聖職に進むことを誓う。これをキリスト教で「召命（めい）」と呼ぶ。司祭曰く、これは突然やってきたらしい。そして、神学校から執事の経験を経て司祭となった。いったいどんな召命があったのだろう？ 想像もできないが、相当な覚悟がないと務まらないはずだ。

## こんなにも心が平穏になる時空が、中之島からすぐにあるとは！（中谷）

大柄で声がいい内田司祭の説教を聴いてみたいと思った。中之島のビジネス街で日々仕事に励む島民たちよ。人生に疲れたときは、すぐ近くにある川口教会を訪れるべし!!　ステンドグラスから漏れる光の中、司祭のお言葉で魂をケアすることを心よりおすすめします。

お知らせ　開館時間内なら誰でも自由に教会内に入ることができる。日曜日の聖餐式（10:30AM～）や木曜日の「聖書の学び」（10:30AM～）にも気軽に参加することができるので一度お問い合わせを。●西区川口1-3-8（地下鉄阿波座駅下車）　☎06-6581-5061　7:30AM～6:00PM　無休

**なかたに・のぼる**　建築家。住宅リノベーション集団「アートアンドクラフト」代表。「NPO水辺のまち再生プロジェクト」の発起人でもあり、暮らしにも観光にももっと川を利用しようと呼びかける、自らも「グッドリバー」な熱血漢。



*Will you join us?*

# 中之島に「入会」しませんか?

文／石原 卓（本誌）

第1回目にご登場いただいた大阪倶楽部。実は、筆者の父親は数十年来の会員である。そのせいもあって、家族イベントなどで筆者も何度か訪れた建物ではあったが、何しろ子供の頃の話。記憶にあるその雰囲気は妙に爺臭く、どこか懐古趣味的な感じがしていた。

取材で訪れたのはまさに10年ぶり。館内の雰囲気はあの時と同じ。ただ違っているのはこちらの心根だけである。館内を行き交う会員（ここでは社員と呼ぶ）は、ほぼ父親と同年代らしき好好爺ばかり。取材で中之島が大大阪時代の中心地だった頃のことをさまざまな角度で観てきたからだろうか。今だからこそ、社交クラブという古のパブリック思想が新しく思えてくる。

大阪を東洋のマンチェスターにしようとした先人たち。今のように会社の売り上げだとか、個人の年収など小さいことにこだわらず、「大大阪パブリック」を形成しようとした息吹は、実のところ、我々が子供の頃に悪ガキと徒党を組んだ〝少年探偵団〟的なものなのではないかと思う。

大阪倶楽部への入会規定には、現社員2名の推薦が必要とあった。ひとりは我が父親、そしてもうひとりは、かつて大手新聞社において関西を闊歩されたというN氏にお願いした。定例の将棋の会の前にお会いすることになり、大阪倶楽部伝統の談話室で待つ。粋な着流し姿のN氏が快活な笑顔で登場された。入会の意志と推薦人になって頂きたい旨を手短にお願いして、N氏の署名を推薦状にいただく。周囲に居合わせた好々爺たちも、微笑ましげにこちらを観ている。ほら、やっぱりここは〝少年探偵団〟なのだ。

元気が無くなってきたと言われて久しい関西経済。実はN氏や大阪倶楽部のメンバーたちのような紳士の遊び心がなくなってきたせいではないか？とも思う。島民パブリックの会員資格は、実のところ、こういう遊び心が原点にあるのかも知れない。2月の定例午餐会の後、正式に社員資格が与えられると、事務局からご連絡を頂いた。さぁ、まだまだ若輩者の筆者は大阪倶楽部を遊び場にできるだろうか？

番外編

# 大阪倶楽部に、入会しちゃいました。

右上は桐箱に収められ、入会資料と共に郵送されてきた会員（社員）バッチ。島民パブリックへの通行証のような気がして、筆者は勝手に盛り上がってしまったが、入館時に着ける規定はないようだ。

# 「ちょっと釈せんせに聞いてみよか」

現役ばりばりのお坊さんが島民たちの悩み・疑問にお答え。
へえ〜仏教って意外と「使える」やん！

## ●質問その一

「霊感」について疑問がいっぱいあります。どうすれば得られるのでしょう？必要な人には備わるんですか？釈先生は霊感、または霊体験はございますか？決して霊感が欲しいのでなく、別に霊感なんてなくても生きていけるのに、どうして備わっている人が世の中には一定数いるのかなぁと思っているのです。需要と供給の一致なんでしょうか。それとも何かの名残なんでしょうか。

（女・23歳・大学院生）

## ●解答

霊感を「一般の人が気にしないような微かなシグナルを感じること」と定義するなら、人間のメカニズムから考えて、不思議でも何でもありません。誰にでも起こりうる現象です。ただ、その現象を「死者の霊」などと意味づけする人もいる、といったところでしょう。

禅や瞑想トレーニングを実践すると、ありえないビジョンが見えたり、聞こえるはずのないものが聞こえたりします。私たちは、感覚器官からの情報をもとに、自分の中で映像や音声を再生しています。ですから、再現の整合性が乱れたり、脈略のないものが見えたり聞こえたりすることもあります。そして、信仰のプロセスにおいても、そのような体験が伴うこともありますが、それは宗教の周辺部分です。伝統宗教なら、きちんとそう説くはずです。

ちなみに、私にはまったく（いわゆる）霊感などありません。だいたいものすごく鈍感な人間なので、微かなシグナルどころか、多くの人が気にするようなことさえ気づかないのです。

## 仏教

釈徹宗（しゃくてっしゅう）

大阪・池田市にある如来寺住職。兵庫大学准教授。先月には、約400年前に世界に先駆け仏教・儒教・道教・神道・キリスト教のことごとくを相対化して論じた日本人について記した『不干斎ハビアン―神も仏も棄てた宗教者―』（新潮社選書）が発売になったばかり。

## ●質問その二

常々、結婚式のあり方に違和感を感じています。誰かのお祝いの会って、基本的には、「めでたい人がいるから祝ってやりたい」という、第三者によって成立するものですよね？けれど、今の一般的な結婚式って、おめでたい張本人である新郎新婦が、周囲に気を遣いながら開いている感じがします。祝いの席は第三者の好意によって開かれるべき、こんな考え方はちょっとズレていますか？

（男・34歳・書店員）

## ●解答

まず、「結婚式」と「披露宴」を分けて考えましょう。「結婚式」は、「成人式」「葬式」と並ぶ、人類三大「通過儀礼」のひとつです。人類は、状態が変化する場合、必ず「通過儀礼」を行なってきました。成人式は、子供というカテゴリーから大人へ、結婚式はそれまでの家族という括りから新しい家庭へ、葬式は生者から死者へ。「通過儀礼」は、人間にとってとても重要な線引きであると思います。

さて、「結婚式」後の「披露宴」は、それまでにはなかった義務や権利が生じたことを関係者にお披露目する場です。結婚という制度は社会的な営為であって、決して結婚する当事者だけで完結しない、そのことを自覚する場なのです。だから「共食行為」を実践するんですよ。飲食を共にするのは、関係性の第一歩ですからね。それを自覚できていれば、みんなが「おめでたい」と祝おうが、二人が「ホスト・ホステスとして」招待客を楽しませようが、何でもいいんですよ。

### 魔境【まきょう】

禅では、通常ではない現象や感覚が起こることを「魔境」と呼びます。それは何も〝人間を超えるすごい体験〟ではなく、「ああ、そんなの捨ててしまえ」程度のものです。でもやはりきちんとした指導を受けねば、おかしな方向へと進んでしまいます。「魔境」から還ってくる手立ては「呼吸法」だそうですよ。

●仏教用語の処方箋

### 挨拶【あいさつ】

披露宴につきものの「挨拶」ですが、本来は仏教用語です。「挨」は〝押す〟、「拶」は〝せまる〟という原義ですので、ぐっと前へ進み出る、といった意味になります。禅では、僧侶同士が真剣に対峙することを「一挨一拶」と言います。

●仏教用語の処方箋

**質問募集**　このコーナーでは釈徹宗先生への質問を募集しています。職場での人間関係の悩み、家庭生活の中のふとした疑問などなんでもけっこうです。
メールもしくはファックスにてお待ちしております。e-mail.uketsuke@140b.jp　Fax.06-6445-2106





# 今月のテーマ【配達人】

颯爽と風を切っていくその姿に、目を奪われたことはないか。
中之島を縦横無尽に駆け抜ける配達人を見逃すな！

取材・文／溝口さやか（本誌）

**審査員／大平秀峰（ひでみ）さん**
**［NAKAGAWA1948 梅田桜橋店］店長**

老舗らしい風格と肩の力が抜けるフレンドリーさを兼ね備えたテーラーにて、絶妙な採寸テクニックを誇る〝ゴッドハンド〟として知られる。［NAKAGAWA］と言えば淀屋橋WESTにも店舗があり、島民にもおなじみ。☎06-6348-5200

「書類でも果物でもどんとこい！」

**B-DASH（ビーダッシュ）**
**高田 羽（つばさ）さん（24）**

忘れた携帯を自宅まで引き取りに行ったり、撮影用の果物を運んだり、メッセンジャーって意外といろんな物をお届けしてるんです。阪神のヘルメットを被っていれば車のドライバーさんも不思議と親切。僕のお守りみたいなもんですね。

これは目を引くコーディネイトですね〜。やはり速そうな自転車は中之島のようなリバーサイドがよく似合います。阪神タイガースのヘルメットは確かに良いアイデア。このまま広島に行ったらカープに変わるのでしょうか。12球団ぶん揃えて、エリアごとに変えるなんていう楽しみ方をご提案したいですね。

**四川厨房（スプーン）SPOON**
**北村岳士さん（25）**

わが神戸大学アメフト部員が代々引き継ぎ、中華粥の「ちゃりんこ屋台」をやってます。平日のランチタイムに肥後橋郵便局横のコンビニ前か、信濃橋付近で販売しているんですが、社会人のアメフトチームに勧誘されたこともありましたよ。

ユニフォームは赤色ですが、赤というのは食欲をそそる色。しかもがっしりとされた方ですので、余計に美味しそうに見えますね！ブルコギなんか売っていたらたまりませんよ。飲食業もパフォーマンスの時代なんですね。

「〝ちゃりんこ屋台〟は体力勝負！」

**柳々堂（りゅうりゅうどう）**
**松村 隼（じゅん）さん（26）**

うちは建築関係メインの書店なので、建築事務所や専門学校など１日30件ほど配達します。運搬用の自転車が無かった頃は、本の重みで前輪が浮いたそうなんですが、今は注文品以外の本も一緒に乗せて行ける。もちろん『島民』も一緒です。

緑色のボックスのくすみ具合といい、年季が入った自転車ですね。見るからに頑丈で、質実剛健といった印象。トップスはＡ１タイプのボア付きブルゾンでしょうか。服装も華美でない今くらいが自転車に合っていますね。

「注文品プラス好みに合いそうな本を」

**GOKU（ゴク）OMUSUBI**
**田渕大視（ひろみ）さん（36）**

ドーチカにお店があるので、その周辺の企業さんへの配達が多いです。でも入口で警備員さんに必ず止められてしまう。目立ちすぎるんでしょうかね？　たまに「そのカゴどこで買えますか？」と通りすがりに声をかけられることもあります。

頭から足下まで、コンセプトが貫かれているのがよく分かります。おにぎり屋さんの雰囲気もよく出ていますよ。目立ちすぎるのもご愛敬でしょう。ちなみに私は北新地のクラブで従業員と間違われてしまうんですよね…。

「おむすび専門の飛脚です」

ちょっと、隣のビルまで。

取材・文／大迫 力（本誌）

第7回

# ［写真とプリント社］@西村ビル

## 島の光をたっぷり集めて輝く、写真のための部屋。

フィルム、デジタル画像からのプリントは１枚35円～。昔風の白縁をつけたり、大きさ、紙質などを１枚ずつ選ぶことができる。フィルムや撮り方についても親切に教えてくれる。

室内は什器も含め白で統一。窓から注ぐ自然光を柔らかくはね返す〝レフ板〟代わりだ。

たとえば橋から見えた夕陽にはっとして、デジカメのシャッターを押す…。今や当たり前になった行為だが、その写真をプリントして持っているという人はどのくらいいるだろう？　一説によると、約７割の人がデジカメ写真のアルバムを作らないらしい。そんなデジタル全盛時代にあえて、いやそんな時代だからこそ、このフォトアトリエが生まれたのかもしれない。

ラボマンの小倉さんは、現像所で８年間勤務。その相棒とも言える現像機は、カフェのようにお洒落な空間で圧倒的な存在感を放つ。

フォトアトリエとは耳慣れないが、現像所・自然光スタジオ・オフィスが一つになった空間のこと。入るのは常安橋のたもとに建つ築35年ほどのこぢんまりとした西村ビル。カメラマンの平野愛さん曰く「太陽の光がたくさん入る場所を探していたら、自然と中之島周辺になった」そうで、デザイナーの松川祥広さん、ラボマン（現像士）の小倉優司さんと３人で、自転車に乗って川沿いの物件を探し回った末に見つけた。苦労の甲斐あって、土佐堀川に面した窓からはたっぷりと光が注ぐ。窓に向かって置かれたテーブルに写真を広げれば、１枚１枚の持つ色や風合いがよく分かる。小倉さんが言う通り、「現像した写真を見てもらうには最高のシチュエーション」だ。

窓際のテーブルは「写真と向き合ってもらうため」の場所。自分の撮った写真を手に、１時間くらいいる人も。気に入ったものをすぐに焼き増しすることもできる。

3人が「プリント」にこだわるのには理由がある。「プリントした写真ってリアルに手に取れる面白さがあるでしょう」。松川さんが強調するのは〝画像〟と〝写真〟の違い。確かに、縁を付けたり大きさを変えるだけで、全然違う写真のように見えるから不思議だ。「写真ってカメラマンだけでは完結しないんですよね」。プロの撮り手である平野さんのそんな言葉にもなるほどと思う。手に取れる形にしてくれる場所があると思えば、カメラを持つ気分も変わってくるかもしれない。

### 写真とプリント社

写真の現像だけでなく、スタジオにて証明写真を撮れるようにする計画も。また、カメラマンでもある小倉さんによる写真教室も月１～２回のペースで開催中。日程などはHPにて。☎06-7504-9459　10:00AM～7:30PM　日～火曜休　http://photo-print.co.jp



ナカノシマニア

取材・文／松本 創（本誌）

# あのノーベル賞理論は島の物理学教室で生まれた。

昨年日本の4人が受賞し、大いに世を沸かせたノーベル賞。だが、国民に与えたインパクトは、やはり「第一号」が一番だろう。昭和24年、湯川秀樹博士の中間子論による物理学賞受賞。敗戦まもない日本人に大きな希望を与えた偉業が、実は中之島で生まれたことをご存知だろうか。

場所は、現在の大阪市立科学館。ここにはかつて、大阪帝大理学部があった。創設は昭和6年。京都帝大の若手研究者だった湯川青年はその2年後、新しい大学で最先端理論の量子力学を究めようと、講師として着任した。自伝『旅人』に、こんな回想がある。

「（教授陣は）新進気鋭の学者が多かった。そんなわけで、古い大学には見られない、清新の気がみなぎっていた」「ここにいると、何か仕事をせずにおられないような気持になる」

ところが実際は、なかなか論文が書けず、焦燥の日々だったらしい。「理学部長の八木先生に『お兄さんに頼まれたから君を阪大に引っ張ったのに、いつまでも論文を書かないようでは困る』と、机を叩きながら怒鳴られたそうですよ。さすがに自伝には書かれてませんが（笑）」と、科学館学芸員の斎藤吉彦さんが教えてくれた。

それで目が覚めたか、27歳の湯川青年は昭和9年秋、陽子と中性子を結ぶ中間子の存在を予言する論文を発表する。「物理学の中心地だった欧州では当時、新粒子を唱えるのは〝邪道〟だったんです。学界の潮流からすれば僻地の、新興大学だったからこその発想だったかもしれませんね」と斎藤さん。

科学館にはもう一つ、ノーベル賞学者との縁がある。昨年受賞した南部陽一郎博士が3年前に来館していたのだ。博士の「対称性の破れ理論」を説明するために斎藤さんが作った展示「磁石のテーブル」を見に来たそうで、その工夫にいたく感心していたとか。

湯川博士と南部博士。新旧物理学界のスーパースターと島の縁を伝える展示は、科学館4階に仲良く並んでいる。

南部理論を説明する「磁石のテーブル」と考案者の斎藤さん。カーアクセサリーの方位磁石を1000個敷き詰め、物質に質量を与える「自発的対称性の破れ」が目で見て分かる仕組みになっている。斎藤さんは、この展示の論文で、「日本物理教育学会大塚賞」を受賞している。背景写真はいずれも科学館の展示資料。上は昭和９年完成の理学部校舎。下は32歳の湯川（京大基礎物理学研究所所有）。

### 大阪市立科学館

湯川博士が6年間在籍した阪大時代の写真や直筆原稿が、サイエンスギャラリーに。科学館を拠点に、湯川博士の業績や思想を研究する「市民の会」がまとめた冊子も販売されている。☎06-6444-5656

# トウミン月報

2009年2月1日発行

## 大阪歴史博物館に『島コーナー』登場

上／「中之島の美観」
大正14年（1925）撮影　『大阪市大観』大阪歴史博物館蔵（柴垣和夫氏寄贈）より
右／「新大阪ホテル」
昭和10年（1935）撮影　大阪歴史博物館蔵（日本建築協会寄贈）より

「小さいですけどうちにも中之島の風景コーナーを作りました」という嬉しいメールが編集部へ届いた。島と聞けば一目見なければ、と大阪城のお隣、「大阪歴史博物館」を訪ねた。入場券を買い、タイムマシンのような高速エレベーターを降りると、古代から現代までの大阪がドラマチックに展開される展示が楽しめる。前号の歴史特集で、関一市長や五代友厚といった偉人のインタビューをさせていただいた筆者だけに、改めて展示の充実ぶりに舌を巻く。幕末の船場の街を再現した精密な巨大模型や、大大阪時代のリアルなセットは島民ならずとも、大阪好きには見ごたえ十分だ。順路をすすむと、7階の一角に「中之島」の文字を発見。そこには、今はなき名建築、新大阪ホテルや朝日会館の貴重な写真が並ぶ。他にも明治・大正・昭和の島の風景写真が全部で15点。「京阪中之島線の開業にあわせて何かできないか」と島想いな学芸員のみなさんの心意気に、思わずほろりときた編集部員であった。●

大阪歴史博物館（地下鉄谷町四丁目下車）9・30AM～5・00PM（金曜日～8・00PM）火曜休（祝日の場合は翌日休）展示は3月31日（火）まで。（若狭健作・本誌）

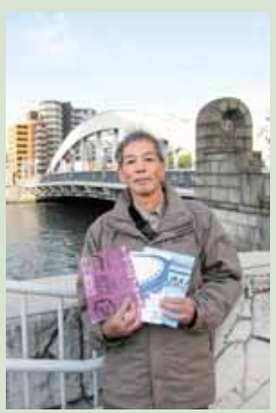
## 絵はがきでVIP気分を味わう?!

「外観もええけど、中も見学できたらなぁ」というファンの声に答えるべく、大阪市中央公会堂の絵はがきが発売されているのをご存知だろうか？　それも開館90周年記念とあって、建物のたたずまいやライトアップの様子だけでなく、普段は滅多なことでは足を踏み入れることのない、大正ロマンあふれる集会室や、特別室の天井画などの写真も。さっそく編集部でも手に入れようと訪れると、保存版に、お土産に、ラブレター用に（？）と求める先客が並ぶ。大阪市中央公会堂のみで発売される限定モノなので、お早めに。地下1階の事務室にて発売中。8枚入りで700円。問い合わせは☎06・6208・2002まで。（溝口さやか・本誌）

夜景、インテリア、ステンドグラスと島のスーパースターを微に入って紹介。堪能していただきたい。

## わたしと『月刊島民』

山田吾郎さん（神戸市須磨区・会社員）



会社の定年とほとんど同時期に中之島の病院に入院する羽目になったところ、友人が持ってきてくれたのが『島民』でした。もらったのは紫の表紙の第5号。入院中の身に飲み屋ばかりの特集って、ちょっと辛いものがありましたが（笑）。「こんなに小さい島の話題だけで月刊紙なんてすごいね」と家内も感心しています。左の絵は、橋のコーナーに載っていた堂島大橋が自分の病室からも見えたので、退屈しのぎに描いたもの。普段は旅先でさっと描くのが好きなんですが、これはじっくり描けたかな。今年からまた働けることになったので、健康のためにもゆっくり島を歩いてみようと思っています。

編集・発行人／江 弘毅（編集集団140B）
編集・発行／月刊島民プレス
若狭健作　綱本武雄
（株式会社 地域環境計画研究所）
松本 創　大迫 力（編集集団140B）
〒530-6591
大阪市北区中之島3-6-32 ダイビル140B
Tel.06-6445-2105　Fax.06-6445-2106
制作進行／堀西 賢（ALEGRESOL）
デザイン／山﨑慎太郎
表紙イラスト／奈路道程
印刷／佐川印刷株式会社


### 配布にご協力いただける方を募集しております！

（島外の方でも大歓迎！）

京阪電車主要駅／京阪シティモール／京阪モール／デリスタ天満橋店／ホテル京阪天満橋／ホテル京阪京橋／ブックファースト梅田店／旭屋書店　本店／旭屋書店　梅田地下街店／旭屋書店　堂島地下街店／ジュンク堂書店　大阪本店／ジュンク堂書店 梅田ヒルトンプラザ店／リブロ 梅田阪神店／ブックファースト淀屋橋店／文教堂書店 淀屋橋店／福家書店淀屋橋店／天牛堺書店 大江橋店／紀伊國屋書店　本町店／ジュンク堂書店 天満橋店／アパンティBC OMMビル店／紀伊國屋書店 京橋店／大阪市中央公会堂／府立中之島図書館／専門学校中の島美術学院／朝日カルチャーセンター／大阪大学中之島センター／大阪倶楽部／大阪国際会議場／市立住まい情報センター／大阪商工会議所／大阪企業家ミュージアム／大阪市立中央図書館／宗是そば／喫茶 大大阪／ネイルサロンスワンナ／ABC朝日放送／MANGUEIRA／TOSABORI SANDWICHBAR／Girond's JR／じろう亭／ミニジロー／BAR THE TIME 天神／N4タワー　マンションパビリオン／ホテルNCB／ザ・メロディ／なんば書店カルチャーコーナー　その他、取材協力先

次号予告

## イッツ・ア・中之島デザイン

威風堂々たるビルや橋の意匠はもちろんのこと、手に取れる「モノ」においても、中之島はグッドデザインの宝庫だ。シブくて気品ある「中之島デザイン」が生まれる現場を訪ね、買って帰るとしよう。

●『月刊 島民』vol.8は2009年3月1日発行です！

月刊島民 中之島 7号 2009年2月1日発行 編集・発行人／江 弘毅（140B） 編集・発行／月刊島民プレス 〒530-6591 大阪市北区中之島3-6-32 ダイビル140B 定価0円 Printed in Japan

こころまち つくろう
KEIHAN
京阪電車

大阪府立中之島図書館
森小路けい子・音大生

# 中之島、時を旅して

過去と現在、日常と非日常が交差する、このシマへ。京阪電車で。

シマへ行こう。

中之島線
Nakanoshima Line
nakanoshima-line.jp

おけいはん 検索 www.okeihan.net

京阪のる人、おけいはん。